

大分県現代俳句協会句会報 第13号

【令和3年 第1回雑詠句選句号】

令和3年5月29日発行

令和3年度の第1回雑詠句会には70名から210句が寄せられました。途中で現代俳句大会があり、印象が薄くなりましたが、予定どおり第1回雑詠句会の選句をお願いします。

令和三年、第一回雑詠句会の投句作品集

1 母の背の広きなるかな掘炬燵
2 トラクター売って農家の冬去りぬ
3 どの夢もいつか銀河へ消えてゆく
4 分校の庭栗おとす笑顔かな
5 冬薔薇錆た鉄の初仕事
6 ストーブの猫やわらかくなるばかり
7 鳥渡る鎖骨に神をやどらせて
8 コロナ禍や黙り色して秋の蝶
9 振り袖の若き娘と孫競う
10 風の目で湯島の梅を見ておりぬ
11 一つずつ手離す齡秋の暮
12 球磨川氾濫一瞬杉丸太の流れだ
13 秋の蚊や執念深き私生活
14 逝くことも留まることも沙羅の花
15 わが道の標となりて水仙花
16 運の字の車に乗って厄落し
17 柚子釜の臍に夜風の機嫌かな
18 猫の唄かなしき色の冬月夜
19 病む妻にほうれんそうの紅を買う
20 晩年に思いめぐらすちゃんちゃんこ
21 青春の夢は花野を渡る風

22 雷神の筆鮮やかに時空越え
23 ハヤブサの浦島太郎の星光る
24 雪来るか萬年筆で書く日記
25 立春や新書の香りゆたかなり
26 自粛待機いても立つても鳥渡る
27 己が影踏みつけつまづく冬の道
28 ささくれのように西日が突き刺さる
29 一輪の水仙の香に救われる
30 どんぐりのまだ青々と部活の子
31 古衣に色足袋合はす一葉忌
32 初競りやマグロ祝儀も桁違い
33 豆腐切るまでの掌水温む
34 一葉の願い叶えぬ蜘蛛の糸
35 柴栗を拾って村を売りに出す
36 温かな湯に溶けてゆく重き肩
37 鳥帰る波止に歓喜の引揚船
38 友だちの詛うつくしレノンの忌
39 立春や臉の重き金曜日
40 この坂も越えてひと息着ぶくれる
41 遠い日の麦とろ作った父の背
42 コロナにも自粛はしない虫の声

43 冬銀河「はやぶさ2」の道標
44 冬雲雀飛ばずに歩く空がある
45 点滴の明日の手術や冬茜
46 寒紅の口もとキリリ太鼓打つ
47 晴天が三日続いて弥生くる
48 枯野きて句帳に残る風の音
49 枕辺に野辺広がりぬ虫時雨
50 春惜しむ無観客のコンサート
51 初鏡一瞬母を重ねけり
52 指切の小指がさわぐ夏祭り
53 障子閉めほどよき距離となるふたり
54 独り居の日日ゆく仲間新曆
55 寒月を揺らして入る露天の湯
56 未来図へ飛び出してゆく冬木の芽
57 集いなく鐘ひそやかな毎日蕎麦
58 春近し久大線に風立つ日
59 雨あとの樹々の香春の匂ひせり
60 草枯るる地の揺かごに眠りつく
61 春先番いよいよ猫の恋の声
62 ろりろりと蛇口をつたふ養花天
63 落椿果てて魂残りけり
64 三日の月余生の支点定まらぬ
65 薄氷の底に農婦の深き皺
66 出征の兄遠くなる終戦忌
67 デイケアは茶寿を目指してスクワット
68 目の覚めて窓の白さや雪景色
69 青空と鳥と自由と梅の風

70 最澄の春の憂鬱延暦寺
 71 妻旅におでん三日の鍋の底
 72 芋食うや戦後の日本に又コロナ
 73 あと少し笑顔を足して小春とす
 74 傷ついて婚姻色の鮭遡上
 75 コロナ禍やジングルベルの宇宙^{そら}の歌
 76 破魔矢売る巫女も官司もマスクして
 77 赤子泣く沈黙いろの蝶が飛び
 78 オリブもぐアテネと同じ空をもぐ
 79 四十六年目満月と重なるハロウィン
 80 絡み合う毛糸をほぐし雨水来る
 81 鉛色の空より孤独羽抜鳥
 82 水番の物音ひとつも照らす月
 83 電子辞書手慣れし操作今朝の冬
 84 廃線の駅に飾りし夏薊
 85 跳び箱の突き手の先に春立てり
 86 座りすぎは寿命縮める福達磨
 87 草刈女家風に慣れし腰かげん
 88 買味噌の時の柔さや祖母の声
 89 冬木立すべての音を透かしをり
 90 着ぶくれて優しさ少し置き忘れ
 91 点滴に春の光を注ぎ込み
 92 蓑虫の糸一本に揺惑う
 93 保護色の山の賑あい根深汁
 94 遠くまで光る寂しさ冬銀河
 95 3・11風化させない海がある
 96 スタンディングオーベーションななかまど
 97 ななかまど
 98 枯れ葛につまづくことも老ひなりし
 99 水の面をついとくすぐる秋茜
 100 会釈する視線の先は陽炎えり
 小春日や初恋に会う古希の会

132131130129128127126125124123122121120119118117116115114113112111110109108107106105104103102101
 日短しピエロの靴の先の反り
 冬うらら聖地にドーンと神楽殿
 小春日の窓辺に椅子を二つ置く
 鴨の足泳ぐに難き水を踏む
 枯芒村に呼び込む道がない
 振り向かず去りゆく友よ霜の夜
 旧正のサイゴン炎と血と泥と
 柚子の湯に人棲む胸をはなちけり
 三月の色鉛筆に恋をする
 三寒の走れぬペンと四温待つ
 囊落つ傘寿の近き漁夫の手に
 言い訳はしないと決めた冬銀河
 表札の護る空き家に春の雪
 遮断機の無い踏切を雪の道
 退院し帰れば庭に梅一輪
 あやまちを責めるか宿のものがり笛
 この町に生き六十年の豊後梅
 手に拾ふしぐれ紅葉に空仰ぐ
 月の射る土偶はああと言ひしまま
 老犬に残る枯野のひほひかな
 いづくとも山河はやさし日向ぼこ
 ホロホロと泣きたるごとく銀杏散る
 寒菊のひかりも母の忘れもの
 今生の廻る舞台や梅の花
 冬ぬくし長野馬貞の墓掃除
 薄氷やきのうの嘘がばれそう
 繰り延べを気遣う効験初詣
 春光や九重の峰と空と川
 蜆汁恩師のことば蘇る
 去年今年治まる気配見せぬ敵
 竜の姿の枝にちよんちよん梅の花
 地図上の春一番の死のゆくへ

164163162161160159158157156155154153152151150149148147146145144143142141140139138137136135134133
 春雨のそりそりと地に吸はれ
 ぬくめ酒欠けも凹みもかかえきて
 黒鍵を弾く春昼の弱き指
 落ち椿灯をともしつつ地にかえる
 雪国へ行く不安なポストのはがきたち
 庭とりの春一番によるめけり
 寒灯の窓にへのへのもへじかな
 源平の夢のかたち熊谷草
 巢籠りのお伴八鹿今年酒
 トラクター売られて行くか明日のわが身に
 百千鳥風青ければ青く鳴く
 嫁入りの行李を捨てて梅日和
 柿熟れる過疎の夕暮佇ずみて
 黒鍵の少し重たい春隣
 怪我をせし指の先から秋祭
 ネクタイも名刺もいらぬ初詣
 年重ね牛の如くに生える日々
 初恋が遠ざかってゆく冬灯し
 過去となる今日という日の曼珠沙華
 しがらみが嫌いで空き家の烏瓜
 いぶし銀の秋刀魚食卓は夕餉
 若冲の筋目書なる芭蕉かな
 鶯餅の粉を払えば飛び立てり
 歳末の「おうち時間」に活気あり
 花蜜柑見て来し喉の喜べり
 かすみ草見守る人の冬やさし
 ブルーベリー枯る色にて魅せてをり
 笑みサロン姉の歩幅や落葉道
 生きている一病息災春を待つ
 錦秋や真一文字に筆を引く
 密葬の貼り紙のあり大根引く
 結び目のほどけぬ余生枯むぐら

寒灯の庭を何かが横切れり
 ラグビーや我が家に欲しきノーサイド
 山茶花を散らし跳びたつ群雀
 坂道の風のんのんと秋の色
 あれそれで廻る職場の梅見かな
 野獣めく車列のライト秋の暮
 少女より少年句ふ雪ばんば
 初東風に行き交う人や声もなし
 家族増え賀状はみだす笑顔かな
 難解な詩集に刻の経つ夜長
 廃屋に風が息継ぎ山眠る
 忠告に背を向け歩く冬の道
 メーデー歌運河はヘドロの水淀み
 子を産みし日のかなしみのぼたん雪
 突然の陽射しにひるむ露の臺
 新雪のしじまを揺らす琴の弦
 理不尽も無理も受け入れ年明る^{あけ}
 変化など望まない日のつむじ風
 想い出の半分昭和藪椿
 冬木立イルミネーション鼓動めく
 こぼれ湯のささやく如く春の月
 錠剤を数える日々や山眠る
 イヨマンテの夜を広げて春の雨
 冬山の向ふに生きて拝すかな
 雲の影生れて流れし大枯野^あ
 てふてふのこれより二千キロの旅
 黙したるひいなに気品生まれけり
 風ふかば花びらとなる冬の蝶
 天国と言えなくもない梅の下
 出会いかな桜吹雪の地に空に^{にがっ}
 二月一日移動命令冴返る

203202201200199198197196

水仙の香りことさら重たくて
 感染症薄れもまだし春の月
 白梅の一輪二輪そして五分
 初恋の秘めたるままに卒業す
 冴返える躊躇し身なり整える
 大概は目白のたかる梅の花
 なまきずも枯るる間もなき絵踏かな
 バレンタインデーあげるあげないあげよかな

以上210句の選句・選評を

お願いします

◆10句選+選評を別紙の投句用紙で

今回の第1回雑詠句会には70名から210句が寄せられました。わずか70名と笑われそうですが、新役員になった過去3年間では群を抜いた多さです。当協会が最大の会員数を擁したのが河野輝暉会長の頃であり、調べてみたら、雑詠句会には平成20年に71名参加、平成21年に82名参加という記録があることが分かりました。今回はそれに続く第3位の人数ということになります。これは新会員が50名以上増えたことや、新会員が意欲的に活動し、それに刺激された従来の会員も積極的に参加するようになったことが理由の一つであると思われます。

いたずらに数を追いかけること自体には意味がありませんが、何よりも数は影響力であり、数は財政の基盤です。最近俳句に興味を持ったという、まっさらな新会員も増えていきます。新

210209208207206205204

冬青空一掃したき世の不安
 春寒へ刃物のごとく煙立つ
 初雪を乗せて静もる捨て小舟
 降る雪の積らぬ國にいてわびし
 草萌へやまったのは入る相撲かな
 水仙の囁きを聞く伊豆の海
 冬籠りして目を逸らす核のゴミ

以上

会員、従来会員を問わず、当協会に入会した目的の一つは、「俳句が上手になりたい」ことであることは明白です。それに応えることが当協会の最大の使命であり、存在理由だとしつかりと位置づけた活動をしていきたいと思えます。ご意見やご要望をお聞かせください。

令和3年 第2回雑詠句会

〈作品募集〉

- ※第2回雑詠句会作品を募集します。ひとり3句で協会未発表のもの。会員に限りです。
- ※年2回の雑詠句会と、8月募集の自薦作品の計10句が特別選者による年間一句賞の対象になります。(3回揃わなくても可)
- ※締切は令和3年6月30日(水)消印。
- ※今回は分かりやすいように、第1回雑詠句会の選句・選評の締切と同じです。
- ※同封の投句用紙を使い、お近くのコンビニからファックスしてください。ハガキやメール等でも受けつけ可。宛先は事務局まで。



大分県現代俳句協会

OITA-KEN GENDAI HAIKU ASSOCIATION

会長 有村 王志

《事務局》

〒879-7151 大分県豊後大野市三重町西泉436

足立 攝 方

TEL.&FAX. 0974-22-3749 郵便振替 01900-5-5748

URL:<http://www.gendaihaiku.net>

E-Mail: info@gendaihaiku.net

●大分県現代俳句大会では、当初の予想を上回る24名の会員外の方が、添削やアドバイスを希望され、それを当協会の役員等10名が手分けして丁寧に応えました。大変好評でお礼の手紙やメールをたくさんいただきました。そのうちの数名が入会しました。先輩が後輩に親切に手ほどきする……これを当協会の気風にしていきたいと思えます。会員で添削やアドバイスをご希望の方は、ご自作の3句を添えて事務局にお申し込みください。締切はありません。